



モンゴル国教育文化科学省 国際協力機構(JICA)  
「子どもの発達を支援する指導法改善プロジェクト(フェーズ2)」



JICA - コーエイ総合研究所

指導法改善プロジェクト NEWSLETTER

2011年8月版 第2号

授業研究実践報告

授業研究とは

本プロジェクトでは、「授業研究」という手法を使って、教員の指導法改善を推進しています。授業研究は、1) 授業の準備(教材研究を背景として)、2) 授業の実践(研究授業)と他の教員による観察、3) 授業についての検討会 という3つのステップで構成されています。授業を実施する教員は、授業を観察した教員等から助言をもらって指導法を改善することができます。また、観察する教員も、授業を実施する教員の新しい指導法/優れた指導法を学ぶことができます。

この授業研究は日本では100年以上も前から行われており、世界の教育界から注目を集めています。モンゴル国教育文化科学省も授業研究の有効性を認め、「2010-2011年度の目標」において、「義務教育学校の各教員は授業研究の実践方法、つまり新指導法を研究するとともに、各校は授業研究実施計画を策定し、今年度において2回以上の授業研究を行うこと」と定めています。

モデル校での授業研究実践の様子

プロジェクトのモデル校では、2011年2～3月、授業研究が実践されました。

プロフェッショナル・チームとプロジェクトチームは、1) 2010年11月にプロジェクトが実施した研修の成果及び問題点を確認すること 2) 各モデル校の授業研究実践に対して助言すること、を目的に、モニタリングを実施しました。

ニューズレター第2号では、各モデル校で実施された授業研究の様子を、モデル校から寄せられた声を基にご紹介します。

ウランバートル市ソングノハイラン区

ウランバートル市ソングノハイラン区では、イレードウイ統合校、第12学校、第67学校が本プロジェクトのモデル校として活躍中です。

イレードウイ第3小学校の総合学習では、子どもたち自身が「水」というテーマを設定し、テーマに即した課題についてグループごとに研究を行いました。研究授業となった中間報告会では、子どもたちから「アパート地区とゲル地区の水利用についての比較」など興味深い発表がなされ、調査の過程において教員が良きアドバイザーの役割を果たしていたことがうかがえました。

第67学校の化学の研究授業では実験が行われ、子どもたちの観察力や授業への関心・参加度合いが向上している様子が確認できました。これまでの授業では実験を行う機会が少なかったため、実験の実施には困難もありました。今回の研究授業、授業後の検討会を通して、「授業を通して何を子どもたちに理解させること」や「子どもたちの回答をあらかじめ予測しておくこと」が、子どもたちの積極的な活動を促すことが分かりました。



数学の研究授業の様子  
(セレンゲ・ソム校)

子どもの発達を支援する指導法改善プロジェクト(フェーズ2)

モンゴルでは2005年、初等・中等教育に新しい学習指導要領が導入されました。新しい学習指導要領では、子どもたちに自ら知識を構築していく力を育成することが求められています。この指導要領が全国の学校で実践されるためには、各教員が新しい指導法、すなわち子ども中心の指導法を身につけることが不可欠です。

モンゴル国教育文化科学省は、国際協力機構(JICA)の協力を得て、2010年4月から「子どもの発達を支援する指導法改善プロジェクト(フェーズ2)」を開始しました。

プロジェクトの目標は、フェーズ1(2006～2009年)で作成した教員用指導書と現在、作成中の研修モジュール等を活用して、モンゴル全国に子ども中心の指導法を普及する制度を構築・強化することです。

モンゴル国立大学、教育大学、教育研究所、教育文化局及びフェーズ1の関係者で結成された「プロフェッショナル・チーム」、モデル区・県であるソングノハイラン区、ボルガン県、ザブハン県と共にプロジェクトを実施しています。

目次：

授業研究実践報告	1-2
子どもの発達を支援する指導法改善プロジェクト(フェーズ2)	1
授業研究実践セミナー開催	2
授業研究に対するプロジェクト専門家からのアドバイス	3
今後の予定	4
プロジェクトコーディネータ紹介	4
プロジェクトチームより	4
プロジェクト連絡先	4

## ボルガン県

ボルガン県のモデル校は、第1学校、ヒシグ・ウンドウル・ソム校、ホタグ・ウンドウル・ソム校、セレンゲ・ソム校、ゴルバンボラグ・ソム校の5校です。

ヒシグ・ウンドウル・ソム校の「人間と自然」の研究授業でも実験が行われました。観察を通して結論を出すことを子どもたちに学ばせたいと考えています。実験器具などの教具は不足していますが、身近な材料で器具を作るなど、工夫しています。今回の授業研究を通して、安全管理の重要性に気付いたそうです。

## ザブハン県

ザブハン県では、チャンドマニ・エルデネ統合校、トソツェンゲル第1学校、ソングノ・ソム校、バヤンテス・ソム校、ザブハンマンダル・ソム校、シルーステイ・ソム校の6校がモデル校として活躍しています。

ソングノ・ソム校の「人間と環境」の研究授業では、子どもたちがすでに持っている知識や理解を考慮した教材を準備しました。今回の経験から、授業の準備がよくなされれば、授業が成功することが分かりました。授業研究は教員同士、教員と子ども、そして子ども同士が学び合う機会を提供してくれます。授業研究に関わった教員は、自分自身の指導法を改善していきたいという強い意欲を持つようになりました。

シルーステイ・ソム校のITの研究授業では、日頃、消極的な子どもも授業に活発に参加している様子が観察されました。これまで実施されてきた公開授業では、授業者が1人で全てを行わなければなりませんでしたが、この授業研究では複数の教員が協力して授業の準備を行います。ITの

授業を実施した教員は「授業準備を通して、経験豊富な他の教員から学ぶことができた」とコメントしています。もちろん授業のすべてが計画通りに行われたわけではありません。けれど、今後の授業をより良くしていくための経験として、今回の授業研究は大変良いものでした。

## 授業研究の成果と課題

今回の授業研究を通して、ほとんどのモデル校が下記のような成果があったと報告しています。

- ・授業の準備が大切であることが理解できた。
- ・教員同士協力して授業の準備を行い、助言し合うことで大きな学びを得ることができた。
- ・子どもがすでに持っている知識や理解に基づいた準備を行うこと、子どもの反応を予測しておくことが重要であると気づいた。
- ・教員の指導法が変わったことにより、子どもたちにも変化が現れている。(授業への積極性、チームワークの向上など)

一方、下記のような困難もありました。

- ・授業の準備に時間を要する。
- ・同じ教科の教員が少なく、専門分野に関する助言を得られにくい。
- ・実験器具などが不足している。

各学校では、身近なものを利用して実験器具を作るなど、様々な工夫して困難を乗り越えました。また、校長や学習マネージャーの協力も円滑な授業研究の実施には欠かせないものでした。



バヤンテス・ソム校による発表



算数分科会



プロジェクト専門家による講義

## 授業研究実践セミナー開催

2011年6月2～4日、モデル区/県関係者、プロフェッショナル・チームメンバーなど100人余りが集まって「授業研究実践セミナー」が開催されました。

セミナー1日目には各区/県における指導法改善の取り組みが紹介され、授業研究実践がもたらした教員と子どもの良い変化、今後の課題等が共有されました。2日目には、プロジェクト・フェーズ1から指導法改善に携わってきた教員による研究授業が行われ、参加者間で活発に意見交換が行われました。最終日は、プロジェクト専門家が「初等教育と中等教育における授業研究の違い」、「学力テストでは測れない子どもの能力を測る方法-プロセススキルを確認する一例」について講義を行った後、モデル区/県における2011/2012年度の指導法改善計画策定準備作業が行われました。

セミナー参加者の発表から、授業研究実践が教員のみならず、子どもにも良い変化をもたらすことに気付き始めている様子がうかがえました。「子どもが授業に関心を持つようになった」、「自分の考えや気持ちを表現するようになった」という声が聞かれました。

また本セミナーでは、ウランバートル市、ボルガン県、ザブハン県のプロジェクト関係者が、初めて一堂に会しました。それぞれの成功体験や抱えている困難について語り合うことを通して、互いに良い刺激を受ける機会となったようです。

## 授業研究に対するプロジェクト専門家からのアドバイス

より有意義な授業研究を行っていただくために、プロジェクト専門家からのアドバイスをいくつか紹介します。

### 1. 研究授業としてふさわしい授業

外部から観察者を招くような研究授業では、観察者にとっても下記のような学びがある研究授業を行う必要があります。

- ・指導にはたくさんの方があることに気づく。
- ・子どもの成長しようとする力の素晴らしさに気づく。
- ・教材を見る目が鍛えられる。
- ・子どもたちの思考過程を見る目が鍛えられる。

上記のような学びのある授業とは、新しい概念、新しい考え方、新しい現象を扱う授業、子どもたちの思考力を鍛えるような問題解決の授業、子どもと教員、子ども同士のやり取りの中で、子どもが成長する姿が分かるような授業です。

逆に、単純作業の繰り返しだけ、計算練習だけ、試験、読書だけの授業は研究授業にはふさわしいとは言えません。授業研究会の日にそのような授業が当たってしまう場合には、スケジュールを調整する必要があります。

### 2. 研究授業の生徒

授業者はできる限り、自分が日頃担当している十分そのレベルや能力および性質について知っている子どもたちを対象に授業を行うべきです。子ども全員を授業に参加させて、全員を成長させるためには、授業の中で、それぞれのレベルや能力および性質に合わせた質問や発表をさせる必要があるからです。

### 3. 指導案について

授業の準備は、大変重要な授業研究のプロセスです。授業を計画する際に、授業のテーマをきちんと絞ることが重要です。例えば、理科の場合、1コマの授業で3つも4つも実験を扱うことはできません。

指導案には、子ども観(つまり、子どもの日常経験、既習事項、前時学習の概要)についての説明が必要です。その時間の授業で、「どのような子ども(授業前の子どもの姿)」を「どのような子ども(授業後の子どもの姿)」に変えるかを明確にしなくてはなりません。

### 4. 授業の実践について

#### 1) 情報機器の使用:

普通の授業ではプロジェクターを使用していないのに、研究授業のときにだけ無理に使用している、ということはないでしょうか？情報機器を使用する際には、それを授業の流れの中にきちんと位置付ける必要があります。

#### 2) 黒板の使用(板書)

日本の小学校では、1コマの授業中、教員が何度も黒板を書いたり消したりすることはあまりありません。子どもたちが黒板をノートに写せば、その時間の流れが把握できるように計画して書かれているからです。

授業研究においても、板書は大切な観点です。観察者もその板書を見て、授業者の意図を知ることができます。一方、授業を行う教員にとっても、事前に板書計画を行うことによって、自分の授業計画が具体的かつ明確になり、改善点が見えてきます。

#### 3) 子どもへのご褒美

授業中に、子どもたちに褒美のものを与えている授業もあるようです。これは、子どもの学習意欲を高める方法として、本当に適切でしょうか？他にも学習意欲を高められる方法はあるはずです。普段から、生徒をよく観察していれば、どのような場面で何を褒めたら効果的かが分かります。

#### 4) 時間配分

授業は時間内に終わらせることが原則ですが、計画通りに授業を行おうという考えは「子ども中心」の考え方にはなじみません。その時の子どもの様子を見て、時間の配分を変更していくことこそ、「子ども中心」ではないでしょうか。

### 5. 授業観察について

#### 1) 観察者の役割

授業観察を行う際には、観察者の役割をあまり分業化しない方がいいでしょう。分担された役割だけではなく、授業全体も見ようしましょう。授業全体を見ることで、授業の良し悪しも分かりますし、観察者にとって新しいことを学ぶ機会ともなります。

特定の子どもに注目して観察する場合は、その目的を明確にしてください。

#### 2) 観察の観点

授業者は、事前に授業研究のテーマを観察者に伝え、どんな視点で観察して欲しいかを明らかにしておきましょう。また何より、子どもの反応に気を付けてください。子どもの顔が見えるところで観察するのが基本です。

#### 3) 観察で点数をつけることについて

通常、日本の授業研究では、教員に得点をつけるような評価は行っていません。

### 6. 授業検討会

授業後の検討会は、授業を行った部屋で実施するのが理想です。授業で使用した黒板や掲示物、実験器具を置いておくと、話し合いが活発になり、改善点も指摘しやすくなります。

## 日本の教員は忙しい？

日本の小学校の教員は、平均して1週間に18.8時間、中学校では14.6時間の授業を教えています。(1週間の勤務時間は原則40時間です)。モンゴルの教員と比べると、教室で教えている時間が短いと感じるかもしれません。

教員の仕事は授業をすることだけではありません。教材研究など、教科指導の準備、試験問題の作成や、成績処理、また子どもたちが学校にいる間は、課外指導、部活動の指導、安全管理の責任があります。他にも、保護者対応、学校行事、職員会議、校内や教育委員会への報告書作成など様々な仕事に従事しています。

多くの教員は、会議や報告書作成にかかる時間をやりくりしながら、少しでも子どもと向き合う時間を増やしたいと考えているようです。モンゴルの教員の皆さんはいかがですか？

文部科学省「平成22年度学校教員統計調査中間報告」より  
(データは2010年10月1日現在)



\* 本ニューズレターは、モンゴルの読者向けに作成したモンゴル語版を基にしたものです。

## 今後の予定

### 国立教員養成大学の関係者を対象とする「授業研究」実践方法紹介のための研修

プロジェクトチームは、教育文化科学省及び国立教員養成大学との協力のもと、2011年8月29～30日に、国立教員養成大学の12校の管理職や教員を対象に「授業研究」実践方法と研修モジュールを紹介する研修を予定しています。

### 子ども中心の指導法普及のための研修

各区/県の教育文化局およびプロジェクトのモデル校を対象に、1)子ども中心の指導法および授業研究に関する知識を深め、2)指導法改善における各自の役割を認識し、3)授業研究を実践する能力を養成する目的で研修を実施することを計画しています。

2011年11月にウランバートル市(2カ所)、ボルガン県、ザブハン県、セレンゲ県、ドルノド県にて開催の予定です。

指導法改善は、継続が肝心です。これからもプロジェクトチームは、プロフェッショナル・チームと共に、モンゴルの指導法改善のために具体的な支援を行っていきます。

## プロジェクト・コーディネーター紹介

2011年6月、プロジェクトの新コーディネーターとして、N.オユンツェツェグ氏が任命されました。

### プロジェクト・コーディネーター挨拶

教育分野では数多くのプロジェクトが実施されていますが、本プロジェクトは、教員の指導法改善や学校における現職教員研修制度構築に重要な役割を果たしていることが特徴です。フェーズ1で8教科の指導書を作成したことについて、皆さんはすでにご存じのことと思います。フェーズ2では1年目に、モデル校の管理職と教員を対象に授業研究実践方法に関する研修を実施しました。またプロジェクトが実施した日本での研修にプロフェッショナル・チームから9名、JICAの実施するその他の研修に18名のモンゴルの指導主事および教員らが参加しました。プロジェクトの2年目には、38名の指導主事および教員が日本での研修に参加する予定です。また、11月から授業研究実践方法を全国に普及するための研修が開始します。

授業研究は子ども中心の指導法改善に重要な役割を果たします。授業研究が実施される体制を強化することによって、教員の指導法改善がさらに発展するものと信じています。

## プロジェクトチームより

2011年3月11日に日本を襲った東日本大震災に際しては、プロジェクトのモデル校を始め、多くのモンゴル教育関係者から寄付や温かい励ましの言葉をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

## JICAプロジェクトチーム連絡先



住所：  
Room 119,  
Government Building III  
Ministry of Education, Culture  
and Science, Baga toiruu-44,  
Ulaanbaatar, Mongolia

Tel/Fax : +976-11-322552  
E-mail: jicacctm@gmail.com

ウェブサイト  
<http://www.jica.go.jp/project/mongolia/004/index.html>